

平成 30 年度第 2 回加古川市子ども・子育て会議 議事要旨

日時	平成 30 年 10 月 15 日（月） 14 時 00 分から 15 時 15 分
場所	加古川市役所新館 10 階 大会議室
出席委員	杉山会長、下村副会長、北委員、木村委員、小泉委員、田口委員、玉田委員 藤井委員、藤池委員、藤木委員、三柴委員、吉田委員
会議次第	1. 開会 2. 議事 （１）第二期子ども・子育て支援事業計画の策定に向けた利用ニーズの把握について （２）特定教育・保育施設の利用定員の設定について 3. その他 4. 閉会
配付資料	資料 1：平成 30 年度第 2 回加古川市子ども・子育て会議 座席図 資料 2：第二期子ども・子育て支援事業計画の策定に向けた利用ニーズの把握について 資料 3：アンケート調査票（案） 資料 4：利用定員の設定について 資料 5：加古川市特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業利用定員一覧表 （平成 31 年 4 月 1 日予定） 当日配付資料：放課後児童健全育成事業（児童クラブ）アンケート調査票（案）

議事要旨

1. 開会	
2. 議事	（１）第二期子ども・子育て支援事業計画の策定に向けた利用ニーズの把握について
事務局	第二期子ども・子育て支援事業計画の策定に向けた利用ニーズの把握について資料 2 から資料 3 により説明
委員	資料 3 の問 18 及び問 19－2 について、「これらの事業の利用には、一定の料金がかかります。」という文言があるが、アンケートに回答する立場で考えると一定の料金がいくらなのか知りたい。末尾に一覧を添付すると情報提供にもなりアンケートに回答しやすいのではないか。 次に当日配付資料である放課後児童健全育成事業（児童クラブ）アンケート調査票（案）の問 3 の 2 について、放課後子ども教室の利用希望を尋ねているが、放課後子ども教室についても末尾に説明を追加してほしい。

	また、アンケート調査の対象について、小学校就学前の子どもを養育する保護者の中から無作為に抽出した市民 4,000 人には、小学校に就学する直前の年長及び年中の子どもの保護者も含まれるかと思う。子どもの就学にあたり教育・保育施設等と児童クラブの開所時間が異なることは、保護者の不安につながっているのではないかと想像するが、「時間帯が変わることによる不安はありますか。」「時間帯が変わることによりファミリーサポートセンターの利用が必要となりますか。」など保護者の意向を尋ねるアンケートを実施してはどうか。
事務局	1 点目のご意見について、資料 3 の末尾に市が提供している主な子育て支援サービスについて制度の概要と利用料金を掲載した資料を、加古川市の子育て支援メニューとして示しており、当該資料についてはアンケート調査票とともに同封し、発送する予定である。再度、確認を行い、届いた調査票のみでアンケートに答えていただけるような形をとりたい。 次に、放課後児童健全育成事業のアンケート調査票について、放課後子ども教室の説明を追加するなど、回答にあたって分かりやすい形を検討する。また、平成 31 年度以降の児童クラブの運営については、保護者負担金の改定や開所時間の変更を予定しており、保護者の方に延長利用料金として月額 2,000 円を負担いただくことで、現在の開所時間である 8 時から 18 時 30 分を最大 7 時 45 分から 19 時まで利用できるよう準備を進めている。
委員	資料 3 の調査票を拝見し、保護者の労働環境や子どもが病気の際に両親のどちらが休んだのかなど、細かい項目に分かれたアンケートだと感じたが、当日配付資料のアンケート調査票は、児童クラブを何年生まで利用したいかなど利用のニーズ量だけを尋ねるような調査だという印象を受けた。就学前までは様々な角度から子育てのサポートがあるが、子どもが小学生になるとサポートが途端に少なくなるように思う。調査を実施するのであれば、実際に子育てするうえで不便なことや困ったこと、児童クラブの質などを伺うことはできないか。
事務局	約 4,800 人の児童の保護者を対象にアンケートを実施するため、子どもの放課後の過ごし方に加えて、児童クラブの利用満足度や不満な点など、質の向上について意見を伺うことができるアンケート調査票を検討する。 また、小学校就学後の子育てサポートについては、子どもが小学校に入学すると基本的に日中は学校で過ごすこととなるため、当該アンケートでは放課後の過ごし方という形で調査を実施する。保護者によって様々な利用ニーズがあるかと思うが、第二期加古川市子ども・子育て支援事業計画の策定にあたり低学年と高学年に分けて量の見込みを算出するために、このような

事務局 委員 委員 委員	形で利用意向を伺い、満足度の向上につながるような設問の追加も検討する。 (2) 特定教育・保育施設の利用定員の設定について 特定教育・保育施設の利用定員の設定について資料4から資料5により説明 現在、施設整備によって教育・保育施設等が増加し、各園に多数の子どもが入所しているが、子ども達を実際に保育している先生方や現場は子どもが次々に入所してくる状況に疲弊していないか。 世間では働き方改革ということでワークライフバランスの問題が取り上げられ、私達もできるだけ働きやすい職場環境を作りたいと思っている。この度のアンケート調査の結果に基づき算出される、教育・保育や子ども・子育て支援事業のニーズ量に現場として応えたいが、人材の確保ができなければ現場で働く先生に負担がかかってしまう。園としては、様々な事業を実施していきたいという思いがあるが、クラスの子たちを保育しながら、地域の子育て支援事業をしながらとなると、自分達がどこまでできるのかという覚悟が現場での一番大きな問題となっている。各園の現場でそれぞれ大変なことはあるが、保護者や子どもたちの笑顔のために現場の先生は日々懸命に教育・保育を行っている。 また、3号認定児の待機問題に対して、現場として3歳未満児の受け入れを増やしていかなければならないとは感じているが、来年度も地域型保育事業の新設や認定こども園への移行など、施設の整備が予定されており、施設数が増えれば増えるほど保育士の取り扱いになってしまうという問題が発生している。 子ども達や保護者のために、教育・保育の質の確保は大切にしていかなければならない。私立幼稚園としては、質の向上を目指して公立幼稚園とともに学ぶ姿勢を持ちながら、保護者のニーズに応えられる園となるよう取り組んでいる。
3. その他 委員	保育士の確保状況について、私立保育所及び認定こども園に対してアンケート調査を行い、回答があった28施設の結果をとりまとめたため報告する。今年度の採用予定人数は全体で約50人であったが、現在、約30人の保育士が不足している。このうち派遣会社を利用している施設は9施設である。自園にも毎日のように派遣会社から架電がありニーズの高さがうかがえる。

委員	今年度は市の協力により、保育の人材を確保するため、就職フェアの開催や大学卒業後すぐに保育士として働く学生に対する助成などを行い、就職につなげたいという思いで養成学校を訪問したが、なかなか採用に至らなかった。各施設からは、「市として就職支援を行っていることをよりアピールしてはどうか。」「地域の大学である兵庫大学との連携をより深めることはできないか。」「保育士の処遇のあり方についても改善が必要なのではないか。」という意見が出た。また、私立施設の募集にはあまり応募がないが、市における保育士・幼稚園教諭の採用試験の受験者は75人だと伺った。市が人材バンクとなり採用に至らなかった学生を私立施設に紹介することはできないかといった意見もあった。 来年度10月からの実施が予定されている幼児教育の無償化により、入所申込の増加が見込まれるが、保育士不足のなかで現在の定員を維持することができるか、保育士を確保できなければ定員を下げざるを得ないのではないかと不安に思っている。 就職フェアにおいて、どのような園で働きたいか学生に尋ねたところ、給与や処遇、休日日数などワークライフバランスを最も気にしているように感じた。現場として働きやすい環境を整えたいが、一方で土曜日保育の利用者は年々増加しており人手不足が問題となっている。学生にとって働きやすいと思える職場を維持したいが、子どもたちの育ちを保障する保育者の責務も果たさなければならず、これらを達成するためにはまず必要な人材を確実に確保しなければならないという意見も多くあった。保育士不足は加古川市だけではなく全国的な問題であり、4月入所の募集が開始となる現時点で、1人も採用できていない施設も多くある。 採用試験の内容についても大学教授からのアドバイスによると、ピアノはこのレベルでこの曲が弾ければよいなど具体的に示せば、学生は安心して試験を受けられるのではないかと伺った。中には試験を行わない園も増えており、そのような時代になってきたのかと切実に実感している。 要望ではなく、現場の声として話しをさせていただいた。 NPO法人子育てサポート☆きらりんでは、少しでも保育士不足の解消につながればという思いで、3年前から潜在保育士の就業支援講座を開催している。初年度は24人の受講者のうち13人が仕事に復帰し成果を実感している。 委員から就職率が上がらないという話があったが、受講された潜在保育士から伺った、「資格を持ちながらなぜ就職につながらないのか。」「どういった思いで仕事をやめられたのか。」などの思いをまとめた冊子を作成する予定である。「こういった思いがあるから一歩踏み出すことができない。」「こういったことがあれば働こうと思える。」など、現場の方々をはじめ、様々な方
----	---

委員	に思い伝えることで、採用等のお役に立てればと考えている。今年度中に作成する予定であるため完成時には、改めてお配りさせていただく。 兵庫県下には私立幼稚園が約 230 園存在し、毎年、大学の先生と幼稚園の先生が参加する懇談会で話す機会がある。そこでは現在、幼稚園よりも保育所に人材が流れているという意見をよく伺う。要因のひとつとして、保育所等は新任の先生がクラス担任を任されることが少ないため、副担任から始めることができるという部分が安心材料となっている。また、保育所は 0、1、2 歳児の乳幼児と関わるができるという部分も魅力だと伺った。 幼稚園では、先生方も笑顔があり仕事を楽しく進めていけるよう取り組んでおり、園の教育方針や雰囲気の中で学生をいかに育て、子ども達や保護者のニーズに応えられる立派な先生になってもらうかが大切であると感じている。
委員	実習に来た学生がとてもよい人材であったため声をかけたが、大阪で就職するとのことだった。大阪市は家賃補助も充実しており地域間の格差を実感している。 人材不足は派遣で補えばよいという考え方もあると思うが、事前に知ることができる情報は年齢、住所、保育の経験年数程度である。期間限定の勤務となるため正規職員で働いている保育士とは責任感に違いがあり、働くことになっても波長が合わなければすぐにやめてしまうため、そのような部分も園という組織が一丸となって保育を行うにあたり難しい問題である。また、派遣の職員を正規職員として採用する場合は、派遣会社へ追加料金を支払わなければならない、園としては人件費の支出が増加する。 養成学校から採用した学生が園の一員となり、保育士としての素質を伸ばしていくという動きが求められており、努力しなければならない点だと感じている。
委員	国の情勢として経済が向上している時期は、福祉、教育分野への進学人数が減少する傾向にあり、幼児教育・保育の分野についても学生が集まりづらくなっている。現在、国の社会保障関係費は約 3 割であり、そのうちどれだけが子どもにあてられているのかという政治的な問題も、先ほど委員が述べられていた各自治体における保育士採用時の補助金の問題につながるのではないかと感じる。 兵庫大学のこども福祉学科は学ぶ科目を就学前の教育・保育に限定しており、小学校教諭の免許をとらないという形をとっている。しかし、専門的な科目を学んできた学生のうち、数人は企業への就職を希望する。一般的な会計や税の勉強をせず、幼児教育・保育に特化してきた学生は不利になるため、

委員 委員	資格免許を活用して就職活動を行うよう助言している。 また、学生が都市部に流れてしまうという傾向は、都会に出てみたいという若い気持ちに起因してる部分があり、自身にも身に覚えがあるので、否定することができないと感じている。ある学生からの就職相談にて、企業から6年契約の専任という条件を提示されたという話を聞き、企業側は保育需要のピークがあと6年だと見込んでいることがうかがえる。この情報は大学にとって非常に有益なものであり、より一層、学生の学問の専門性を高め、知識と技術を身につけた状態で現場に出てもらいたいと思う。 また、学生は就職活動の際に必ず園を訪問するが、就職の決め手となるのは必ずしも給与だけではなく、園の雰囲気や対応された先生の話であったと聞き、学生も考えなく行動しているわけではないと感じる。 先ほど委員から意見が出た潜在保育士について、兵庫大学でも講座を開講しているが、潜在保育士が多く発生している要因として、なぜ仕事をやめたかが大きく関わっている。また子どもを保育する責任の重さも、職場に復帰することを躊躇してしまう要因になっているようである。子どもの年齢によっては、保育士が6人の子どもを同時に保育しなければならないことを考えると、先生は余分に必要であるように思う。このように、様々な要因が重なり合って、今の状況が生まれているように感じる。 これらの問題をどのように克服し、保育士が自信をもって子どもの教育・保育に従事できる体制を整備することは、自治体レベルで検討しなければならないのではないか。 本学のこども福祉の学生は就職活動への動きが遅く、就職が決まっている生徒は3割程度である。学生には、この度の会議で出た話を伝えたいと思う。 本市には、ユニット12という取組があり、中学生のトライやるウィークや高校生のインターンシップ等で、子ども達と接し幼児養育・保育に魅力を感じてくれる学生も多く存在する。学生の幼児教育・保育を学びたいという思いが地域のなか、ユニット12のなかでつながり、本市の教育・保育が深まり、質の高いものになるよう願う。 自園でも、放送部の中学生が部活動の一環として月に1度、延長保育の子ども達に対して、手遊びや絵本の読み聞かせ等の活動をしており、地域内の交流が広がっている。延長保育の時間は疲れている子どもも多いが、中学生との交流を園児達も喜んでいる様子である。中学生も園児と顔見知りになり、園とは異なる場所で会うことがあると声をかけてもらえることが嬉しいと聞き、ありがたく思っている。
4. 閉会	